

NISAで何をかう？ 導入後6カ月経過したところで、最新6月末までのデータを使い、投資動向を見ると、一番人気はREITファンドの可能性大!

※国際投信投資顧問 投信調査室がお届けする、日本版ISAに関する情報を発信するコラムです。

## 非課税枠について財務・金融相が240万円、経済財政・再生相が200万円と言うなど、 今後が期待出来る NISA だが、導入 6 カ月経過したところで、その投資動向を見る

2014年7月1日(火)に麻生太郎財務・金融相が少額投資非課税制度(NISA)の非課税枠について「**次考えるなら年間240万円が現場に合っている**」と言い、2014年6月28日(土)には甘利明(あまり・あきら)経済財政・再生相が「**200万円に拡大してもいいのではないか**」と言うなど、引き続き今後が期待出来るNISAだが(非課税枠…2014年6月9日付日本版ISAの道その58参照～URLは後述[参考ホームページ])、導入後6カ月経過したところで、最新6月末までのデータを使い、その投資動向を見る。

## 既存投資家中心の投信全体で6月は+3286億円と、6カ月連続の資金純流入

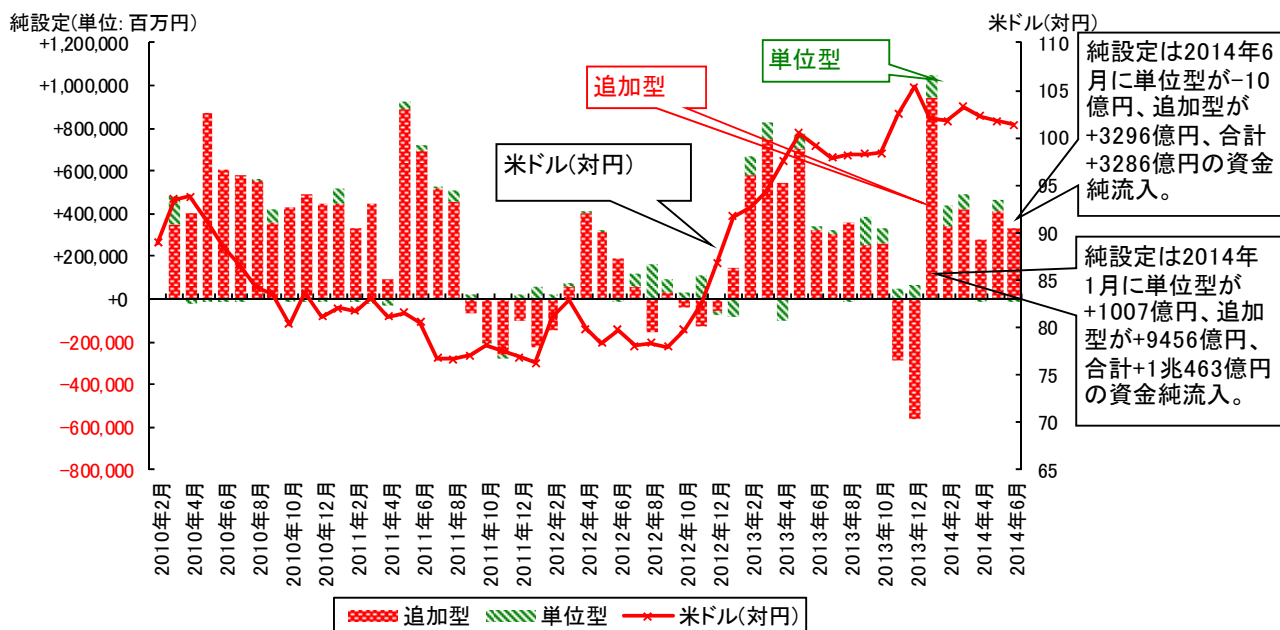
NISAの投資動向を考察するにあたって、NISAの投資家を既存投資家と、投資の未経験者層(新規投資家)とに分ける。そして、既存投資家を中心と思われる投信全体と、投資の未経験者層(新規投資家)を中心と思われるNISA向けファンドの動向を見る(前回…2014年1月20日付日本版ISAの道その42参照～URLは後述[参考ホームページ])。まず下記は「日本の単位型及びETFを除く追加型投信(MMF等日々決算型を除く)」つまり、概ね既存投資家(投信全体)を示す純設定の推移である。2014年6月は+3286億円と、6カ月連続の資金純流入。2013年末の軽減税率終了にかけて大きく解約が膨らんだあと、2014年1月にその反動で設定が大きな純流入となり、その後は最新6月末まで安定的な資金純流入となっている。



日本籍の国内投信の純設定(推計)と米ドル(対円)の推移  
(2010年2月～2014年6月、月次データ)

\*国内投信… 単位型及び追加型投信(ETFとMMF等日々決算型を除く)。

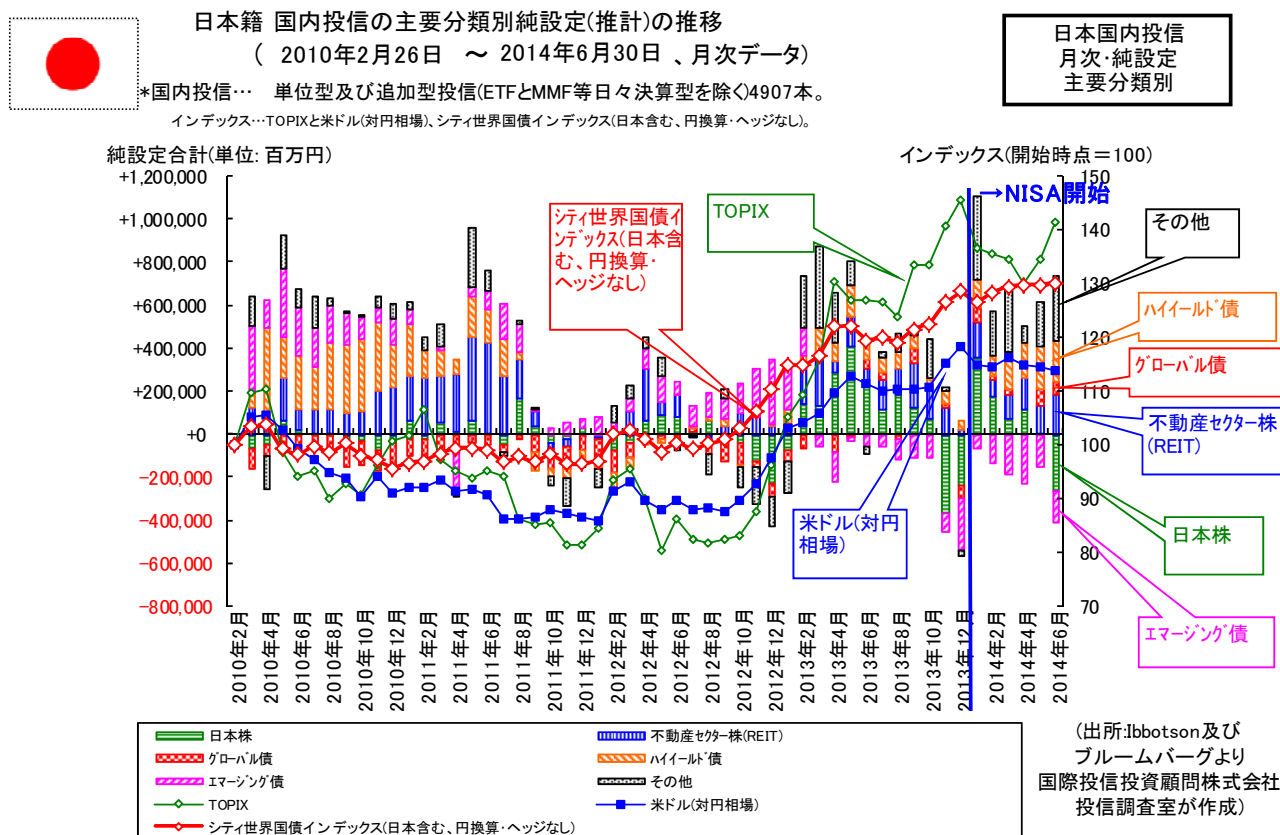
日本の国内投信  
月次・純設定



(出所: Ibbotson, プルームバーグより国際投信投資顧問株式会社投信調査室が作成)

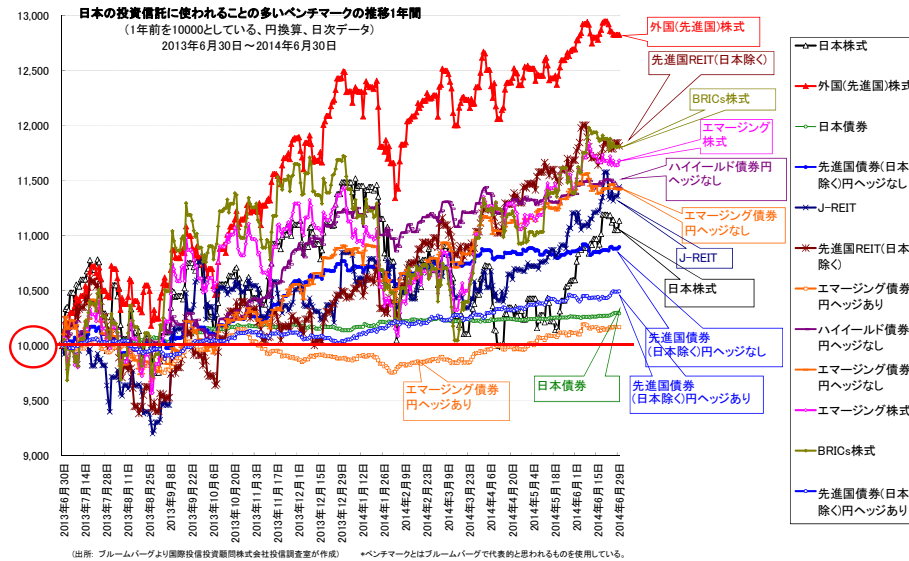
## 既存投資家中心の投信全体を投資対象(主要分類別)で見ると、ハイールド債とREITは純流入傾向で、日本株は純流出に転じ、エマージング債は純流出傾向と跛行性が見られる

2014年6月にかけて安定的な資金純流入が継続している既存投資家(投信全体)の純設定を、投資対象(主要分類別)で見ると、ここ数年の傾向に示される通り、資金純流入が主要分類で別れていると思いきや、最新6月末にかけ、主要分類によって大きく動向が分かれている。純流入ではハイールド債ファンドが最大で、不動産セクター(REIT)ファンドがそれに次ぎ、さらにグローバル株ファンドが続く(\*グラフでは「その他」に含まれる)。こうした分類で純流入が増える中、日本株ファンドが6月に2013年12月以来の純流出となり、エマージング債ファンドの純流出が継続している。この様な跛行性が見られることは最近ない。



ハイールド債ファンドやREITファンド、グローバル株ファンドなどに資金が集まる理由だが、パフォーマンスが好調だった事がある。投信に使われることの多いベンチマークのパフォーマンスを好い順に見ると(\*1年前を10000としている、円換算、日次データ)、先進国株、先進国REIT(日本除く)、BRICs株式、エマージング株式、ハイールド債券円ヘッジなし、エマージング債券円ヘッジなし、J-REIT、などとなっている。

ただ、エマージング債の説明が難しい。エマージング債券円ヘッジなしはハイールド債円ヘッジなしとパフォーマンスが似ているのに、エマージング債ファンドは流出が続き、ハイールド債ファンドは流入が続いているからだ。今後のエマージング債ファンドの流入に期待したいところである。



## NISA 向け(新規投資家)と思われる投信で6月は+1440億円と、NISA 投資開始 2014年1月以来6カ月連続純流入

次に、NISA 向け(新規投資家)と思われる投信の純設定を、まず全体から、次に投資対象(主要分類別)で見る。NISA 向けファンド全体の純設定は2014年6月に+1440億円と、NISA 投資開始2014年1月以来6カ月連続純流入である(\*NISA 向けファンド…後述※欄参照)。



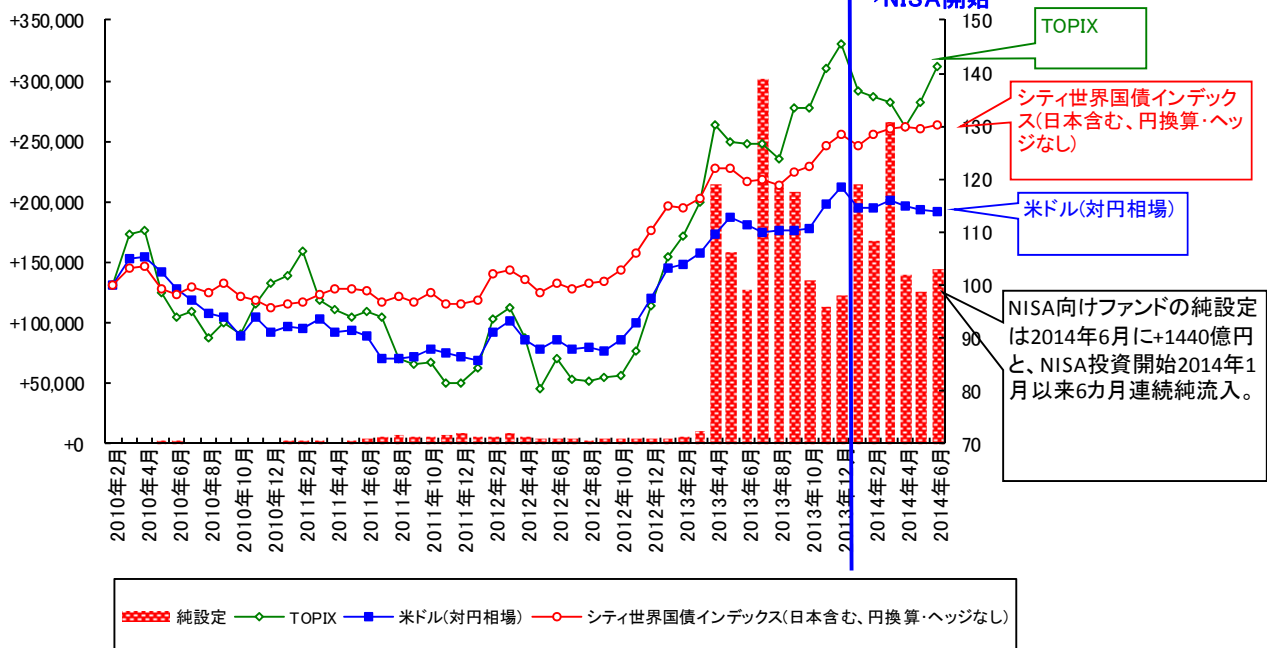
日本の NISA 向けファンド(ETFを含む追加型)の純設定(推計)の推移  
(2010年2月26日～2014年6月30日、月次データ)

\*NISA 向けファンド(ETFを含む追加型)… 2014/06/30 現在580本ある現存ファンドについて。

インデックス…TOPIXと米ドル(対円相場)、シティ世界国債インデックス(日本含む、円換算・ヘッジなし)。

日本のNISA向けファンド  
月次・純設定

純設定(単位: 百万円)

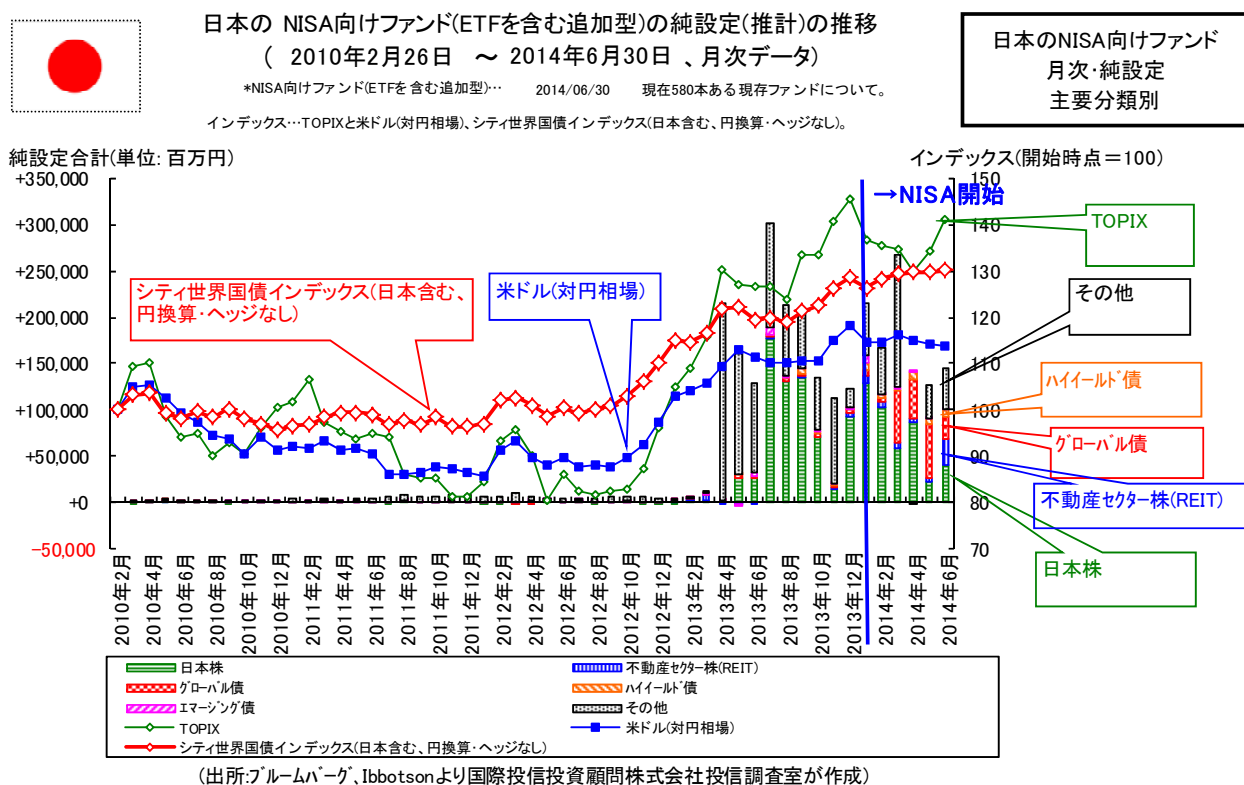


(出所:ブルームバーグ、Ibbotsonより国際投信投資顧問株式会社投信調査室が作成)

## NISA 向け(新規投資家)と思われる投信を投資対象(主要分類別)で見ると、アロケーション柔軟型・日本株・REIT・グローバル債で純流入

2014年6月にかけて安定的な資金純流入が継続しているNISA向け(新規投資家)と思われる投信の純設定を、投資対象(主要分類別)で見る。跛行性を示した先述の既存投資家(投信全体)とは対照的に、NISA向けでは、ここ数年の傾向に示される通り、資金純流入が主要分類で別れている。純流入1位はアセットアロケーション柔軟型ファンド(\*グラフでは「その他」に含まれる)、同2位は日本株ファンド、同3位は不動産セクター(REIT)ファンド、同4位グローバル債ファンドとなっている。

これまで新規投資家(NISA向け)には人気がないように見られた不動産セクター(REIT)ファンドが順位を上げ(前月5月は7位)、先の既存投資家(投信全体)と同様に純設定額を増やした。一方、先の既存投資家(投信全体)では大きく流出に転じた日本株ファンドだが、新規投資家(NISA向け)では勢いこそ年初より弱くなっているが、継続的に志向されているようである。



※「NISA向けファンド」・・・投資信託協会の言う「NISA向けのファンド(\*分配頻度が低いファンド、低コストのファンド、バランス型ファンド)」を参考にしながら(URLは後述[参考ホームページ])、2013年11月末時点の契約型公募投信純資産が1兆円以上ある投信会社17社(\*全84社の約90%を占める)の株式投信(ETFを含む)で「NISA向け」、「NISA専用」、「NISAで選ぶ」、「NISAにおすすめ」などと紹介されているファンド、それに加え、2013年4月以降に設定された分配頻度が低いファンドやバランス型ファンドとしている。なお、2013年4月以降と言うのは、NISAが含まれる税制改正(関連)法が2013年3月30日に成立・政省令公布されたため。尚、単位型・限定追加型・年1~2回分配以外のファンド・DC・SMA・ミリオン(従業員積立投資プラン)を含めていない。ただ、同じシリーズが該当している場合は年1~2回以外を含めている。しかし、通貨選択型については、年1~2回以外を除いている(\*マネー・プールは年1~2回でも除いている)。こうした「NISA向けファンド」を抽出した所、2014年6月30日時点で580本となった。

## 大手証券会社における実際の投資動向で 1 位は野村証券が REIT、大和証券がハイイールド債(2 位 REIT)、SBI 証券 が REIT、楽天証券が REIT と、一番人気は REIT

最後に、大手証券会社各社の実際の投資動向を見ておく。各社の HP に公表されている最新 NISA・投資信託動向をみると、証券会社最大手である野村証券の NISA 口座投資信託買付ランキング(野村ネット&コール)は最新 5 月に 1 位不動産セクター(REIT)ファンド、2 位日本株ファンド、3・4 位アセットアロケーションファンド、5 位グローバル株ファンドとなっている(URL は後述[参考ホームページ])。大和証券の NISA 口座月間買付ランキングは 6 月に 1 位ハイイールド債ファンド、2 位不動産セクター(REIT)ファンド、3 位カナダ株ファンド、4 位米国株ファンド、5 位グローバル債ファンド(URL は後述[参考ホームページ])。参考まで、ネット証券会社最大手である SBI 証券の NISA ランキング・投資信託では、月次の買付ランキングは公表されておらず、公表されている保有残高をみると、NISA 導入から約 6 カ月後の最新 6 月 27 日現在、1~3 位不動産セクター(REIT)ファンド、4 位日本株ファンド、5 位ハイイールド債ファンド(URL は後述[参考ホームページ])。そして、楽天証券の NISA ランキング・投資信託は、同様に月次の買付額はなく、残高は 6 月 26 日現在、1・2 位不動産セクター(REIT)ファンド、3 位日本株ファンド、4 位不動産セクター(REIT)ファンド、5 位ハイイールド債ファンドとなっている(URL は後述[参考ホームページ])。

1 位だけで見ると、野村証券が REIT、大和証券がハイイールド債(2 位 REIT)、SBI 証券 が REIT、楽天証券が REIT と、REIT が中心となっている。先に、既存投資家の投資動向ではハイイールド債と REIT、新規投資家の投資動向ではアロケーション柔軟型・日本株・REIT・グローバル債が人気であることを示したが、この大手証券会社の実際の投資動向を合わせて見ると(共通する投資対象を見ると)、一番人気は REIT ファンドの可能性が高い。

6 月 23 日に金融庁より発表された NISA の利用状況等の調査結果(3 月末時点)で、REIT にはそれなりに人気があるのに、実際の買い付けは小さかったことが示された。これについて、2014 年 6 月 30 日付日本版 ISA の道その 61 では、REIT の単元株価格(最低投資金額)の大きさがその理由かもしれないとした。人気はあるが買いにくい J-REIT の資金も REIT ファンドに向かったと言う可能性である(URL は後述[参考ホームページ])。REIT ファンドであれば、年 100 万円で買って、さらに内外の分散も行えるからだ。それに先の調査結果で示されている「毎月分配型投資信託」と「配当が期待できる株式等」の圧倒的な人気(各々 1 位と 3 位)は REIT ファンドにあてはまる。こうしたことから既存投資家や新規投資家の投資動向とは少し違う REIT 一番人気につながっている可能性がある。もちろん今後はわからない。引き続きデータや報道、各社ホームページ等をしっかり見て NISA 動向を判断していきたいものである。

[参考ホームページ]

2014 年 6 月 9 日付日本版 ISA の道その 58「NISA 非課税枠が年 200 万~300 万円となって本家・英国 ISA に歩調を合わせる!?~マル優等個人向け非課税制度史~」…「<http://www.kokusai-am.co.jp/news/jisa/pdf/140609.pdf>」、2014 年 1 月 20 日付日本版 ISA の道その 42「NISA で何を買う? 2014 年最初の週は新規投資家(NISA 向けファンド)ではアセットアロケーション等ファンドと日本株ファンドが中心で、既存投資家(投信全体)では日本株ファンドと REIT ファンドが中心のようである。」…「<http://www.kokusai-am.co.jp/news/jisa/pdf/140120.pdf>」、野村証券の NISA 口座投資信託買付ランキング(野村ネット&コール)…「<http://www.nomura.co.jp/nisa/nisaranking/index.html>」、大和証券の NISA 口座月間買付ランキング…「<http://www.daiwa.jp/service/isa/ranking.html>」、SBI 証券の NISA ランキング・投資信託・保有残高…「<https://www.sbisec.co.jp/>」、楽天証券の NISA ランキング・投資信託・残高…「<https://www.rakuten-sec.co.jp/nisa/>」、2014 年 6 月 30 日付日本版 ISA の道 その 61「NISA の最新全体像がわかる金融庁の調査結果を他の調査結果や英国 ISA の最新動向を比較しながら解説する。」…「<http://www.kokusai-am.co.jp/news/jisa/pdf/140630.pdf>」。

以上  
(投信調査室 松尾、窪田)

## 本資料に関してご留意頂きたい事項

本資料は日本版ISA(少額投資非課税制度、愛称「NISA/ニーサ」)に関する考え方や情報提供を目的として、国際投信投資顧問が作成したものです。本資料は投資勧誘を目的とするものではありません。なお、以下の点にもご留意ください。

- 本資料中のグラフ・数値等はあくまでも過去のデータであり、将来の経済、市況、その他の投資環境に係る動向等を保証するものではありません。
- 本資料の内容は作成基準日のものであり、将来予告なく変更されることがあります。
- 本資料は信頼できると判断した情報等をもとに作成しておりますが、その正確性、完全性等を保証するものではありません。
- 本資料に示す意見等は、特に断りのない限り本資料作成日現在の国際投信投資顧問 投信調査室の見解です。

### 本資料中で使用している指数について

- ・東証株価指数(TOPIX)は、(株)東京証券取引所及びそのグループ会社(以下、「東証等」という。)の知的財産であり、指数の算出、指数値の公表、利用など同指数に関するすべての権利・ノウハウは東証等が所有しています。
- ・シティ世界国債インデックスは、シティグループ・グローバル・マーケッツ・インクの開発したものです。